

# 初めて行書を学ぶ生徒のための、 行書「基礎練習」

兵庫県尼崎市立武庫東中学校  
今村 一彦

「上手に書きたい」という願い

「自分は字が下手で…」 「習字は嫌いだった」と言う声をよく聞く。中学一年生には書写に対して消極的な生徒が多いようである。

しかし、その言葉の裏には「上手に書きたい」という願いがあるのだと思う。

書写の指導の中心になるのは、やはり「字を上手に書かせること」にあると私は考えている。「上手に書きたい」という願いに応えるために、何をどのように指導したらよいだろうか。いつも悩むところである。

中学一年生で生徒は行書を学ぶが、行書は初めて学ぶという生徒が多い。きっと生徒は、新鮮な感覚で書写を学ぶだろう。これは、自分の字を見直し、少しでも上手に書けるように指導する好機ではないだろうか。

## 行書の「基礎練習」

野球のノック、剣道の切り返しのように、

スポーツには必ず「基礎練習」がある。同じように、行書にも「基礎練習」にあたるものがないだろうか。

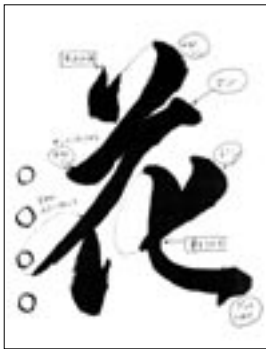
そこで、行書について、次のような毛筆と硬筆の二つの指導を計画し、実践した。

### 1 行書「花」(毛筆) ……二時間

#### ① 楷書「花」と行書「花」を比較させる

黒板に教師が硬筆で楷書と行書の「花」をそれぞれ書き分けて、見比べさせた。

行書は流れるような線に特徴があること、画の省略や筆順の変化があること、最後のはねをかるくとめる、などを気づかせた。



〈手本〉

② 手本を見て書かせる  
筆順だけを教え、「とにかくこの手本そっくりに書きなさい」とだけ指示して、何回か練習させた。

#### ③ 水書板に書いて、ポイントを指導する

「花」には、そつと入る始筆とドンと強く入る始筆があること、線の連続するところがあること、の二点をポイントにした。(ポイントになることは手本に書き込んでおいた。)

#### ④ 始筆と線の連続を練習させる

「飛行機が滑走路に降りてくるように、筆先がそつと紙に降りるのだ」と指示しながら、硯の上で何度か筆を下ろす練習をさせてから書かせた。

机間指導をして、始筆と線の連続ができていないか、見て回った。

(二時間終わり)

